

◎座談会 市民の研究活動は今

池田雅夫・大石友子・鈴木 隆・田口俊夫・南 学

南 横浜市の企画局では「調査季報」という行政研究誌を出しておりまして、三十三年の歴史になります。行政が出している行政研究誌でこれだけ続いているのは、日本でも数が少ないか、唯一ではないかと思っています。

今回は、市民の研究活動を取り上げることになりました。市民の研究活動はさまざまな形で進んでいるわけですが、市民の研究活動をどう行政でとらえたらいいか、市民サイドから考えて、何か行政の課題になることではないかが行政としては論点かと思っています。この座談会では、政策に直接結び付けるのではなく、市民の研究活動にサポート体制として有効なものがあれば、提言もお願いしますが、むしろ研究のきっかけとか研究をどのようになさっているかなどを中心にお話をいただければと思います。

特に横浜の場合、平成二年の国勢調査で見ますと、高学歴がどんどん進んでいまして、三十代、四十代では、短大卒以上の高等教育を受けた方は恐らく五〇%を超えるぐらいです。全国平均を大体一〇%以上上回っています。

と思いますので、横浜は非常に高学歴の方が集まっている。それから、所得階層からいっても、東京に近いことがありまして、高い方もいらつしやる。学歴と所得両面からいっても、自分の時間の使い方がかなり研究指向や文化的なものに向かう傾向がほかの都市よりは高いという基盤があると思います。

そういつた中で、行政のことを考えるにしても、今まで知的資源となりますと、大学教授とか有識者という形で考えていたのですが、横浜市では、知的資源という場合には市民一人ひとりが大変な研究活動、学習活動をしていると思いますので、それを資源としてどう考えたらいいのかもテーマになると思っています。

ですから、行政的な課題には縛られずに、研究を進める上での問題とか、方法論などを紹介していただきながら議論を進めていきたいと思っています。

池田さん、大石さん、鈴木さん、田口さんの順番に自己紹介、活動紹介も含めまして、お話をいただければと思うのですが。

市立大学市民文化研究センターの取り組み
池田 私は、横浜市立大学経済研究所市民文化研究センターで、公開ゼミナールと市民研究員制度の二つを担当しています。

市民文化研究センター事業は、市民と研究者の共同研究を目指してスタートした事業です。最初は公開ゼミナールがメインでしたが、どういう形で共同研究を行うかは非常に難しい問題がありました。なぜかといえば、一九七〇年代までの市民との共同研究の発想では、市民を研究活動に入れても、市民が物を書くということは予定していなくて、調査の手足となったり、討論会などに参加して意見を言うだけなど、モニタリング的な機能程度だったのです。

どんな形にすればもっと本格的な共同研究になるかは、試行錯誤でした。そうした試行錯誤の末に、僕自身が到達したアイデアがあります。これは、生涯学習全体にいえることですが、スポーツ、習い事も含めてほかの学習では、表現の場とか発表の場があります。お花をやる人、踊りをやる人、必ず発表会が



池田雅夫

(横浜市立大学経済研究所市民文化研究センター)

出席者	池田雅夫	横浜市立大学経済研究所 市民文化研究センター
	大石友子	横浜市女性協会事業グループ
	鈴木 隆	「横浜学」を考える会常任理事
	田口俊夫	清水建設開発営業部課長
	南 学	横浜市企画局調査課長

ある。スポーツならば当然試合があります。ところが、お勉強の世界だけはなぜか試合や発表会を想定していません。大学の講座でもだいたいは、聞いて終わり。聞くだけで、研究をしている雰囲気浸っているだけで研究したことになるのかという思いがありました。そこで思い切つて市民も試合をする、発表することを原則とする公開ゼミナールを運営しようとした。

もちろん大学には独自の研究や学習に役立つ機能があるので、それを使うことを前提とし、公開ゼミナールは自分のテーマを持ち、論文で表現する形につくりかえました。中身は問いませんが、体裁は論文にすることを、公開ゼミナールの特徴としました。

ですから、それまでの生涯学習の勉強の講座が、自分で選んで食べるだけのレストラン型とすれば、うちは自分で作る料理学校だという発想です。この料理学校は、一年間のタームですが、研究は個人の積極的な意思とか自主性尊重が基本ですから、いつでもやめられますし、続けたければ一年でも二年でも何年でも続けられます。それでも、公開ゼミナールの形式では、市民の人がいいアイデアがあつても途中で挫折したり、研究にまとめられないことがあり、もったいないという思いが強くなつてきたんです。そこでうまい仕掛けを、と考えたのが市民研究員制度です。

筋肉トレーニングセンターとして

市民研究員には論文を義務づけ

池田 市民研究員は公募です。選考は、大きな研究テーマで公募して、自分なりの研究テ

マを書いてもらい、それと語学の試験と面接を行う。その上で三人とか五人を選んで、自分の研究テーマで、取り組んでもらうわけです。

市民文化研究センターといっても、実質スタッフは三人ぐらいしかいませんので、個々のテーマについて具体的に教えることはできない場合が多いのです。ただ、人文・社会科学には、本の読み方、資料の探し方を始め、論脈の展開などには共通の技術論とか方法論があります。つまりどういう形で話をつくれれば研究らしく、論文らしくなるのかといった技術的なことに中心を置いてやっているのです。

ですから、学校的な機能というよりはトレーニングセンター、筋肉トレーニングの場という発想でやっています。公開ゼミナールでは、論文を書いて書かなくてもよいことが継続できない要因だったので、市民研究員は、三年の間に必ず論文を書くことを軸にしました。そのために技術的なことをインストラクションしますし、独自にいろいろ調べるにはお金も使うので、研究費に類するものを提供する。それから、図書館を教員並みに自由に使えるとか、コンピュータ等も使える。そうした環境で、何が何でも書かなきゃという責任のもとに研究テーマに積極的に取り組んでもらうのです。

ですから、市民文化研究センターのやっていることは、筋肉トレーニングに類することに徹しているとしかいえないようです。ただ、筋肉トレーニングをすると、走りや、泳ぎができるようになるんです。そこから先

は個人の発想とか熱意とか力量とかセンスの問題ですけど。

他の特徴としては、公開ゼミナールも市民研究員制度も、テーマに制限はありません。テーマを特定地域に限定をすることもなく、自分がやりたいことであれば、国際的な問題であろうが、地域の問題であろうが、全く関係ない。

それからこれは、市民で研究を目指す人へのメッセージになりますが、実は研究者の数は非常に少なく、やっているテーマは意外に狭いんです。例えば、学会にも流行があつて、元気な人は流行のテーマにいく。本来研究してもいいテーマ、研究しなければならぬテーマもたくさんあり、流行が去つたテーマもある状態になっています。研究テーマはたくさんあつて、やらないテーマ、やられてないテーマは無数にあるんです。そういうテーマに、すそ野を広げる意味でチャレンジしてほしいと思います。

南 例え話として、トレーニングセンターというと、競技に入る前の基礎トレーニングという感じで、わかりやすいですね。では、続きまして、大石さん。

横浜市女性協会の取り組み

大石 私は、財団法人横浜市女性協会、調査研究事業を担当しています。女性協会は八八年に、男女共生参画社会を築こうと設立され、横浜女性フォーラムという施設を戸塚に開館、九三年に桜木町のランドマークに「フォーラムよこはま」というもう一つの館を開館、両館で女性の自立の支援をしています。



大石友子

(横浜市女性協会事業グループ)

女性の自立支援事業の一つとして、例えば経済的自立を支援するためには仕事関係の講座というように、いくつかの事業を展開しています。また、調査研究事業では、女性たちが抱えている問題とか、身近な女性問題を解決したいので研究したいけれども、活動スペースがないし、お金もないという女性たちの支援を、八九年から八年間やっております。

八年で約五十グループ支援させていただきました。助成金自体はとも少なく、去年が八グループ、今年が六グループで、総額年間二百万円です。現在、女性の研究グループに助成金を出している団体は全国的にもかなりありまして、東京では東京女性財団が、年間三千万円の予算で、大阪府でも一千万円の予算です。それに比べるとは資金的にはとても少ない。では、横浜市女性協会では何が売りかというところ、ソフトの部分といえると思います。例えばどのように調査をすればいいのか、アンケートシートをどう作ればいいのか、どういう集計の仕方をすればいいのか、それをまとめるにはどうやればいいのかとか、そのあたりを私も職員が、相談にのって一緒に進めていく方法をとっています。

あとは、施設を持っていますので、研究グループが優先的に使える企画ルームを設けて、使っていたら、ワープロやパソコンやコピー機といった事務機器も使っていただける。また、子どもの関連の研究者を紹介してさしあげるなどの支援をしております。

基本的には、支援対象は身近な女性問題の解決に役立つテーマとしております。範囲が狭められていると感じられる人もいるように

すが、一見女性問題と関係ないようでも、根底に女性問題と関係があるテーマという範囲で考えていただいていると思います。

例えば今年支援しているグループでは、「女性の働き方を考える会」の、女性と税制と社会保障制度についての文献研究という堅いものもありますけれども、子供の虐待防止プログラムを実施したいというグループも応募しております。また、女性の表現というところで、自分たちで演劇ワークショップをやりたいグループにも支援しております。純然たる研究よりは、活動と研究がクロスしているグループが多いのが現状です。

今後研究助成のあり方をどうしていけばいいとか、いくつかの課題もあるのですが、とりあえず自己紹介ということ。

南 ありがとうございます。
日常生活の中で自分の課題を考えながら、それを研究するという意味で、アカデミックな研究と違うのかもしれませんが、サポートという意味では、場所を持つということも含めて、できているのかなと思っています。

市民の視点、編集者の視点

市民の会が百二十回の研究会を継続の視点

南 では、鈴木さん。

鈴木 初めまして、鈴木です。

私は今日、どんな視点でお話をさせていたどうかと迷っております。とりあえず次の四つほどの視点を考えました。

第一番目は、横浜市民の視点。第二番目は、編集者の視点。第三番目は、ライフワークをもつ人の視点。第四番目は、研究者の視点。

まずはじめに一番目と二番目のことからお話ししていきます。

一番目の市民の視点ですが、これは市民生活を楽しめるにはどうするかということですね。

二番目は、私は編集の仕事をしてきていますので、編集者としての視点です。私は一九七〇年から一九八四年まで東京の出版社（大修館書店）にいました。八四年に横浜に書物学の専門出版社をつくって、十二年になります。

一九八四年に自分の会社を横浜につくると同時に、市民の研究会「横浜学」を考える会をつくったわけです。最初は、「横浜学」という言葉をキーワードに、地域の人といろいろな文化レベルでお話ししながら、自分も成長し、相手も成長するシステムをつくらう、「横浜学会」をつくらうと思ったんです。それはどういうことかというところ、従来のようなピラミッド型の研究会はつくるのはよそう、文化サロンもつくるのはよそうと考えていたんです。日本の学会にはボスがいて、それを一生懸命取り仕切る副社長のような人がいて、そのあとに常務や専務のような人がいて、会社組織と似たような研究スタイルになっているんです。だから、オリジナルなものが生まれにくいわけです。ですから、はじめは市民が生活して楽しみながら学ぶ場所という「横浜学会」を目指したんです。ですから、その「ガク」は、「学」ではなくて「楽」とかんがえてもよいわけです。でも、あまり楽しみに流れないよう、アカデミックな「学」をつけました。



鈴木 隆
（「横浜学」を考える会常任理事）

でも、当時はこの「横浜学」の構想をあま
り理解してもらえなかった。そこで、「横浜
学」なんて成立するかどうか、しばらく考え
てみよう」と、「横浜学」を考える会という
会をつくりました。この会も、一九八四年の
十月からスタートして十三年間目になります。
すでに百二十回の研究会を開催してきていま
す。

「横浜学」を考える会の会は、プロ、
セミプロ、アマチュアで構成されています。
この会のすぐれているところがあるとすれば、
それは、「市民のライフワークの場」を創出
したところにあると思います。池田さんのお
話と重なりますが、私たちも「市民の発表の
場」をつくってきました。難しい規則はない
んですが、会員は必ず他人の前で発表する。
生徒が先生になる、先生が生徒になるとい
うシステムだけは絶対失わないようにしよう
というのが、基本的な考え方です。

この場合、私は編集者としての立場からも
見えています。編集者は黒衣の存在です。プロ
であれ、アマチュアであれ、人の才能を外に
出してあげたいという気持ちがいちもありま
す。そういう点でチャンスを与えてあげよう
と思っています。例えば私どもの発表は、大
体二時間から二時間半ありますから、かなり
調べていないとたないんです。だから、そ
ういうチャンスの場として、ささやかではあ
りませんが、百二十回開催してきたので
す。

私は、もともと地域学というよりも、都市
学をやるうとしたんです。ですから、横浜で
研究したことは、大阪であろうが、ニューヨー

クであろうが、ロンドンであろうが、どこで
もその知恵・技法は必ず役に立つと思ってい
るのです。だから、私は「ニュー都市学」と
呼んでいるわけです。そんな具合で、「横浜
学」を考える会」は、新聞記者とかジャーナ
リストは新しい型の地域学と認定しています
けれども、私どもも新しい視点をもった研究
会だと多少の誇りをもっているわけです。

そんなわけで、都市を市民の視点で生きる
ために自分で楽しみを見つけていく。見つけ
るには、過去から学ぶ、現在を考える、未来
を想像するという、三つの次元から、たえず
市民が何かを研究する。横浜という限定つき
ですけれども、森羅万象、ありとあらゆるテ
マに会員が興味と関心をもつたら、プロであ
ろうが、セミプロであろうが、アマチュアで
あろうが研究し発表する。発表したものに、
聞いている方たちが、もつとよくなる方法と
か、こういう資料があるとか、ここまで調べ
た人はまた別なものがあるとか、建設的な意
見を出そうと、やってきているんです。

運営は、ボランティアで、事務局を私がやっ
ているものですから、本業がある中で、会を
年間平均十回もおこなうのは、ものすごいき
ついです。一回の案内発送に五時間か六時
間ぐらいかかるので、それだけでも年に何十
時間使っています。十三年、第三土曜日はど
こにも出かけられなかった。自分も成長でき
ると思いつつ進めてきました。けれども、百
二十回もやりますと、ちよつと疲れたかなと
いう気がします。

ライフワークの視点、研究者の視点

鈴木 次に三番目（ライフワークを持つ人）
の視点と四番目（研究者）の視点についてふ
れておきます。

私はここ十年ほど「日本人のライフワーク」
について研究しています。私がライフワーク
というときは、仕事（本業）をもって何かを
やる人たちのことです。それを両立させてい
る人たちは、私のファイルの中には、二千五
百人ぐらいいます。その人たちの分析をし、
先ほどの池田さんのお話でいくとアイデアと
技法にあたりますが、今、それを書いていま
す。ライフワークについての本を春、三省堂
から出す予定です。

最後に、研究者の視点です。私はこの八年
間、渡辺多満という女性を研究しています。
安政五年に生まれて昭和十三年に亡くなった
彼女の事跡を追いかけています。彼女は、社
会事業や教育事業等に尽くした人で、亡くなっ
てから横浜で二回ほど表彰されていますが、
彼女の事跡を調べても、ほとんど部分的なこ
としかわからないのです。年表をつくるだけ
で五年間かかってしまいました。

女性フォーラムのように、女性の研究の場
はたくさんあるけれども、たった一人のある
程度知られた女性を調べるとなると、何年も
土日をつぶし、研究しても、すごく手間暇か
かる。多くの図書館であらゆる資料にあたり、
人と会ってお聞きしても、それでもまだ埋め
きれない部分がたくさんあります。

そんなことで、研究者の視点を含め先にあ
げた三つの視点から、今日皆さんと交流でき
ればと思っています。

南 ありがとうございます。

楽しむという、知的な楽しみるところから出発したのは非常におもしろいと思うのですが、今までは研究する環境づくりをしていただいたお三方ですが、今度は現実に研究をした人、博士号まで取ってしまった田口さん、その辺、どんなサポートがあったかも含めてご紹介いただければと思います。

民間企業の開発営業について

田口 田口です。今、清水建設の開発営業部の課長をやっています。仕事は、研究的なことをやっています。開発営業という仕事上の属性と全く関係なく、横浜市立大学の経済研究所の客員研究員を昨年からさせていただいています。

開発営業部は、新しい事業分野の開拓を標榜しているセクションで、建設業にとって新しい分野をどう仕事として開拓できるかを日夜研究しているところです。実は会社に入ったのは五年前ですが、その時から、これからの建設業は、われわれからいうと川上の段階からいろいろな企画を立て、最終的な建物をつくる――これは川下の最下流に行くわけですが――一気だに、事業の全体的なプロデュースをやるべきだと思いつながら会社に入ったんですが、「だったら、試行錯誤でやってみる」といわれ、五年間やっています。基本的なテーマは、高等教育、特に大学はどう変わっていくのかです。それに対して建設会社は、川上部分でどういう提案なり企画をできるのかを研究しています。そのためにいろいろな方にお会いし、いろいろな資料、データを分析したり、

新しい大学ができると、当初の企画をどう組まれたのかとか、実際の教育研究プログラムはどうなっているのかを伺っています。まだまだ勉強をしている状態です。

もう一つのテーマは、流通業界がこれからどう変わるかです。流通業界も非常に幅が広がって、その中のアパレル業界がどう変わるかを勉強しています。アパレル業界は非常に複雑怪奇な分野で、それがわかると流通業の他の分野も割とわかるかなというところで、勉強しています。どう物づくりが変わり、店頭で売られるかを追いかけている毎日です。

そんなことで、建設業としては非常に異質な取り組み方と思うのです。ただ、仕事の成果はまだ上がっていませんので、会社においては、「あの人は何をやっているのかしら」という感じがないわけじゃないんです。後五年か十年すれば何か出てくるかもしれないんですが、その時まで会社が養ってくれるかどうかわかりません。

今の会社に入る前は横浜市役所におりまして、十三年半お世話になりました。入ったところが、企画調整局の都市デザイン担当、今のアーバンデザインがやりたくて横浜市役所に入ったのでございます。会社の開発営業も、企画調整みたいだと言う人がいます。清水建設も巨大な組織ですので、新たな事業の方向性をつくり、社内のいろんな組織や社外の組織も当然同時に、横に束ねていく役割を果たすセクションだと言われる人がありまして、民間も変わらないと思いました。

自分のテーマとして研究

田口 それの仕事でして、それとは別に、かつて横浜にこだわり現在も横浜に住んでいる自分として、子供たちも横浜で育っている中で、横浜と接点を持った自分なりのテーマを組み立てて研究をしたいという思いが強くなりました。ただ、それは、かつての立場と違いますので、自由な研究者ということで研究を進めていく。その結果がどう生かされる、生かされないは、研究者の立場ですから、別の次元の話になるわけですが、自分なりのテーマを見つけてやってきました。

夜は家で、あとは休みの日に研究して、博士号を今から三年前に取りました。そのテーマが、横浜市で仕事をしているとき携わったケーブルテレビと、都市開発をどうリンクしていくかです。それも横浜市をモデルとして、理論化したい、普遍化したいという大それた思いがありました。

発表する場合は学会でして、具体的には日本建築学会ですが、そこに論文を適時発表したのです。論文を書くのも、なかなか時間がかりますので、一年に一本ぐらい書ければいい状態です。つまり、審査員がいて、審査員とやりとりをして、論文の一本が受かる。そういう論文が何本かまとまって、やっと博士論文が書ける資格を大学からいただける。それで初めて論文を書くので、時間とエネルギー、それと大変なお金も掛かります。論文を掲載するには大体一回十数万円弱ぐらいかかってしまうんです。これは学会の掲載の規定がありまして、会員であっても費用がかかるんです。それから、調査に行ったり、資料を収集した



田口俊夫
(清水建設開発営業部課長)

ブぐらいから、一挙に五十何グループと応募が増えました。私たちのめざす人口部分としては、間口を広げた見せ方が必要かなあと感じました。

南 その辺では、池田さんのところで市民研究員の応募の状況とか、応募してくる方のモチベーションとか、経験の差とか、課題がはっきりしているとかはあるのでしょうか。

研究したい人を対象に

池田 応募であれば、今は二期目ですが、一期目にどのくらいの人が関心を持ったかは、わからないんです。ただ、五月の「広報よこはま」に募集を出したところ、十日ぐらい問い合わせや資料請求の電話が殺到して研究所の電話がこの件でふさがってしまいました。資料を請求した人が大体二百人ぐらい、試験に来たのがたしか五十人です。二期目は仕事にならないから、電話での資料請求なしでやっただけですが、それでも資料請求が二百人、応募が五十人ぐらいでした。

ただ、応募は本当はもっと多くなります。あまり多いと試験も大変だし、少人数でやっているのでも、たくさんの人に対応できないので条件を付けたんです。例えば国際化をテーマにしたので、語学の試験をやるとか、論文の提出にワープロなどを使うことを必須とするなどです。あとは、夜やることもあるとか、大学院生はだめとか。つまり、最初から数を減らす努力をしている。語学の試験は、本当に応募者を抑えるためにやるので、語学の試験で決まるわけではないのです(笑)。ただ、大学で語学試験をやるから難しいだろうと憶

している人がいる一方で、それでも挑戦しに来る人を対象にしているのです。

こういうハードルを設けるのは、方法、発想ともかわりますけれども、市民研究員を募集するといつても、僕たちはよくいわれる「市民らしさ」には期待していない。市民で純粹に研究をしたい人を対象にしているんで、最初のハードルも少し高くしています。

鈴木 市民研究員に、ビジネスマンなども出られるチャンスはあるんですか。

池田 そういう人たちも想定しています。月に一、二度程度研究会とか委員会という形で集まります。

鈴木 それは五時とか六時とか…。

池田 一期目は午後でしたけれども、二期目は殆ど夜です。月に一、二回研究会をやる。最初は研究のテーマを決めるところから始めて、そのテーマに基づいて自由に進めてもらい、逐次報告しながら、どんな資料があるとか研究を煮詰めていく。

僕は、このテーマ、このトピックスをどう展開すれば論文としておもしろくなるか、分析として意味があるようになるかとか、そういう反応をしていくのです。いろんなテーマに対して、おもしろくないとかおもしろいとか、それなら数字のデータが必要だとか、比較が必要だとか、そういう形で反応していきます。こういう適宜自由に反応していくという「いい加減な」方法が一番プロの研究者などに説得しがたいところですが、そうやっていけばおおよそできるようになります(笑)。どこの国でも研究は指導者の手取り足取りで完成されるものではなくて、本人の熱意でやっ

ていけば、自然にできていくものです。特に、日本の研究の世界はほとんど教えないですよ。自分で覚えていく形です。

アウトプットの重要性

鈴木 逆にいえば、幼稚園から大学院まで、日本の教育システムでは、学習者側は、常に頭に詰め込むこと、つまりインプットすることに忙しく、本当の意味での創造力を必要とするアウトプットの仕方をほとんど学ばずに社会に出てしまいます。

私の場合でも、編集という仕事は、著者が誰であれ、一つのテーマを考えて、最後は本の形にしていく作業です。このプロセスには、常にインプットとアウトプットの二つの作業が入ってきます。日本には四千三百社出版社がありますけれども、多くの編集者は学問に対しては相当なレベルにあります。だから、企画を考えだすたびに一冊の本を書けるぐらいの力量をもつことになるわけです。

このような点から、アウトプットの仕方は非常に大切だと思っっているんです。市民文化研究センターで、アウトプットの手法を手取り足取り行っている。私は、市民文化研究センターのように絶えず、文献の使い方、情報の集め方、論文のまとめ方という技術を、市民に提供していくという方法は大事だと思うのです。

では、われわれの会はどうかというところ、アマチュアは、プロの発表を見て学んでいく。アマチュア、セミプロもいるわけだから、アマチュアでも三回ぐらい発表していくと、発表の仕方が上手になるんです。発表する過程

で「とても発表できません。もう三年、時間をください」とか「もう二年ください」とかいうんです。だけど、「あなたはもう勉強しているんだから、やってごらんさい」と発表のデッドラインを設けてしまいます。デッドライン（締め切り日）は、どんなことをやる場合も大切です。そして、発表をすることにより、発表の仕方にしろ、まとめ方にしろ、研究の深さにしろ、アマチュアもセミプロも確実に成長していきます。

だから、会を運営している楽しみは編集者の楽しみと同じです。この人は将来伸びると、編集者には人を育てる喜びがあります。総合雑誌の目次を見ると、活字の大きさは別として、大御所がいて、中堅がいて、新人がいて、スペースは違うけれども、水平に並んでいます。あれと同じ方式です。市民文化研究センターやわれわれの会が意味があるとすれば、発表の場だとか発見の場だと思うんです。つまり市民のだけれどもちよつとした勇氣と情熱をもち、ある手順を踏み、ある一定の法則を踏めば、必ずライフワークは完成するという確信は私もあるんです。

横浜を考えるチャンスの場を

鈴木 いささか古いのですが、一九九〇年の国勢調査で横浜の人口は三百二十万人（現在は三百三十万人）です。そのうちの就業者と通学者の総数が百八十九万人。全体の三九%です。このうち七十四万人が日中横浜市から外へ出ている。私はずうっと考えていました。私自身が三十六歳のとき、「横浜学」は、六十歳になつてからやろうと思つたんです。

東京の出版社に毎日おりましたから、横浜で本当の意味で生活するのは定年（六十歳）になつてからだと思つていました。そのときになつたら「横浜学」を提唱して、みんな勉強会をやろうと思つたんです。

つまり、七十四万人が日中市外へ出ていて、そのうちの四十六万人が東京に流出している。その四十六万人が横浜にすっかり足をつけて生活を始めるのは、六十歳過ぎです。その人たちは、地元横浜のこと、自分の住んでいる町のことを、私のように知りたいと思つているのではないかと考えています。仕事をもつていて四十六万人の人たちが、定年になる前に何かやれる場所がたくさんあつたらいいと思つています。

研究にはいろいろな形がある

池田 発表の場とか研究でご理解いただいたのは、公開セミナーでも市民の研究員でもそうですが、常に学会とか研究の状況を判断して、自分がどういう形の研究をするのかを、ねらいながらやることです。研究の世界は一種のパートで、例えば資料目録があつたり、資料の解題があつたり、アイデアだけを積極的に主張する論文もありまふし、ある種の問題整理だけの研究ノートになる場合もあるし、事実関係を確実にした論文もある。いろんな形があつて、研究者も、野球でいえば何時もホームランをねらうわけじゃなくて、三割打者を目指すんです。常に試合に出ていることです。

ですから、市民の人には「あなたがこのテーマなら、今の段階だと確実な年表をつくつて、

それで一丁上がり」、そういう形で、表現や発表を、自分の水準で終えてもらうことに随分気を使つている。山のように本を読んで、かくかくのごとくという論文にするだけが研究ではなくて、研究の現実を見た上で、自分に適合する形をねらつて欲しいんです。

例えば今の情報化社会の問題は、もつともらしい答えはないんです。先はどうなるかなんて全然わからない。コンピュータにかかわるいろんな話を、ずつと関心を持つて見えますが、将来予測の数はほとんど当たつてない。ですから、予測が難しいことをテーマにする人は、かなり自分を出す形で研究をやつてもいい。逆に歴史的なことであれば、方法論なり資料の問題にはある種の型があつて、それを超えるのは非常に難しいから、手がたぐやる方法を教える。つまり研究はデパートだということをおわかつて欲しい。どうしても難しい話を書かなくては研究といえないという錯覚があるようです。

評価の機会を持つこと

大石 鈴木さんや池田さんのお話をうかがつていて思つたんですけれども、私の場合市民研究グループの活性化どう図るかという話をさせていただく時、真つ先に申し上げているのは、他者からの評価を得る機会を持つことを挙げています。いろんなグループを見させていたでいて、こちらが最初思つていた以上に研究を深めたり、しっかり活動していらつしやるグループは、やはり他者からの評価の機会を何回か持つているグループだと感じています。

今回の「調査季報」で書かせていただいている「在宅ワーク研究会」は昨年の支援グループです。このグループも最初は、自分たちが綿密に調査をしたりして、いろいろ研究していたんですが、外に発表する機会がなかったわけです。それを出版社に紹介したり、日経新聞と横浜市の共催でネットワークフェアをやったときにも、分科会のパネリストとして紹介したりで発表の機会を提供しました。そうすると、ほかの地区の、同じようなことをやっている方からコンタクトがあつたりする。ヨーロッパで在宅ワークの研究をやっているグループから、日本支部という形で受け入れてもらえないかというコンタクトがあつたり、どんどんネットワークが広がるんです。ですから、発表の場、評価を得ることはとても大切だと感じています。

自分のテーマを決める

南 多分研究をする場合、職業としての研究者は、方法論をマスターして、それを生活の糧にしているんですが、市民の研究という場合には、最初に何かやりたいというか、自分のテーマがまず出てくると思うんです。それを研究という形で発表して、より客観的に、あるいは広めるために、方法論をサポートしていく、あるいは資金や場所をサポートしていくという感じですけども。田口さんの場合は、現実に自分でやりたいことから始めたと思うのですが。

田口 そうですね。ただ、博士論文のテーマを決めるときは大変でした。二十年前ぐらいに大学院で研究をしたことがあるんですが、

時間的なタイムラグがあるし、修士論文と博士論文はすごい格差があります。博士論文は結構難しいところがあります。一つの論を展開することを求められますから。だから、どういうテーマをやるかは結構悩んで、いろんな人に相談しました。それで、テーマを決めるまでに一年ぐらいかかりましたね。だから、そういうときは適切なアドバイスをいただけないと、研究もなかなか焦点が定まらないですね。

南 皆さんも、もやもやした課題を持っている方が、考えをまとめていくのを手助けしたりしたご経験があると思うのですが、その辺では、共通のパターンがありますか。

仕事と研究

池田 公開ゼミナールで市民の人に共通のテーマなどはありませんが、本当はこれがやりたかったという人は結構来ます。例えば化学会社に長い間勤めていた人が、定年退職されて、やっぱり歴史は好きだから、歴史をやりたいと来ます。つまり、職業についている人生は、もう仕事一辺倒ですよ。もともと自分がやりたいことはたくさんあったはずなんです。退職を機会にやりたい公開ゼミナールに来る。「特定のテーマを抱えながら」というのは違うけれども、こういう機会に勉強するための基本的なところを学びたいという人は結構います。

南 化学会社について歴史をやりたいというのは、歴史にずっと思いを持っていたんですか。池田 そういう強さはないと思いますけれども、これならおもしろそうだと思っていたんで

でしょう。

それからもう一つは、学習する場合、勉強が好きという資質が大切ですね(笑)。研究である程度の水準をやらうとすると、勉強好きでないとはだめなんです。勉強好きの人は、例えば公開ゼミナールのテーマで来てやり出すと、その他にテーマを見つけてどんどんやりだします。

鈴木 勉強好きというのは、学校の成績がよかったことと直結していますか。

池田 それは関係ないですね。

職業・生活に根ざした視点をテーマに

鈴木 仕事をもって何かをやっている人たちは私はずっと研究しているわけです。そうしますと、その人たちの興味、関心がどのようにライフワークに結びついていったかが自分の望むことを実現することは不可能なわけですね。

例えば私が出版の仕事をやっている、辞書の歴史を研究したい、雑誌の歴史を研究したいと思えば、本業と重なっている分野の研究なので一番深めていきやすいんです。

でも、「横浜学」に漫然とテーマももたず入ってくる人がいる。実際、このような人は何年たってもテーマが決まらないわけです。銀行出身ならば、横浜の銀行史とか経済史とか、自分が二十年、三十年やってきたことをバネにして詰めていけばいい結果が出るのに、女性史などをやってみると、よほど情熱がなければやれない。自分の内的動機がいまいだと、なかなかテーマが決まらないんです。

最初の第一歩が踏み出せないんです。そのうえ、東京で生きてきた人生をゼロにして、何か地域のテーマを探さねばと信じ、港の研究とか船の研究とか好きでもないことにのめり込んだり、流行や他人の言動に左右されちゃうわけです。

テーマが決まっていれば、それが少し乱暴であろうが、すべての関連文献を読んでいなくても、「よかった、よかった」といつてあげたいと思っているわけです。だから、まず自分の職業とか生活に根差した視点とテーマをダブらせるのが先決ですね。

もちろん、化学会社に入ったけれども、歴史が好きで、歴史ものならばテレビも見、本も読み、博物館を訪ねる。だから、将来はそれでいこうという。これはそれでよいことです。とにかくしっかりと自分の興味・関心を見極めるべきです。ライフワークを育てていこうと思ったら、四十代の頭、最低四十五歳位までに方向をかためていないと、定年からはほとんど無理です。データファイルで五年、十年の蓄積をもっている人たちを見ていると、大体四十代の頭から四十五歳ぐらいまでに定年後に何をやるかを決めている。それも研究だけじゃなく、探検であろうが、冒険であろうが、表現の仕方はさまざまです。そのため、テーマの選定をどうするかは重要だと思いません。

こだわりから出発

南 その辺では、鈴木さんのおっしゃったライフワークがすごくおもしろいと思うんです。自分自身の人生を考えると、当初は会社、

女性の場合には、結婚とか仕事とか出産とかいろんなことがあると思うんですけども、揺れ動きながら自分自身をどう見つけようかというこだわりをもっている。そのこだわりに対して好奇心をうんと持つていけば、それはある程度勉強につながっていくし、勉強しながら表現力を身につけて、今度は研究という一つのスタイルに消化していくプロセスがあるようです。

先ほど大石さんのおっしゃった、市民研究グループ支援から市民活動研究助成に変えて応募者が増えたのは、何かその辺があるんでしょうか。研究をやるためじゃない、自分のこだわりのところから出発して研究に、何かステップを上がっていくんでしょうか。

大石 そうですね。何かやりたいと思っていて、ある程度の分野は決まっていますが、どうテーマを絞り込んでどうやっていくかまでは煮詰まっていない層がかなりいると思うんです。しっかりとした目的を持って、このテーマで研究したい、そのためのノウハウが欲しいという層も何%かはいらっしやるでしょうけれども、もっともやもや感じていらっしやる方も多いです。そこを具体化していくところから、一つずつステップを上がっていくのだと思います。

グループ支援と個人支援と

大石 ちょっと話が変わるかもしれませんが、うちはグループ支援ですから、もやもやなりに同じような目的を持った人たちが集まって応募してくる。その時に、個人でやりたい人は拾い上げられません。ですから、市民文化

研究センターでは個人を対象にしてるので、システムを勉強させていただいて、うちの支援事業にも取り入れるか、結びつけるとかできるといいですね。せっかく横浜市内の中でもいろいろ支援機関があるので、連携がとれればいいと感じました。

池田 うちが基本的に個人です。今は男性が多いんですが、最初は女性が多く来られて、どうしてもグループでやりましょうとなる。見ていると、ピラミッドとはいってませんが、私は頭、私は体、私はよくわからないから資料集めだけ一生懸命やりますとなる傾向があります。しかし研究は非常に孤独な作業だという現実があるわけです。その現実を無視して、だれでもやれますとはできないので、集めるのも読むのも書くのも個人でやって、一回やったことにする。そういう意味では、かなり個人に重点を置いています。

研究—横浜学のキーワード

鈴木 私は「横浜学」を説明するときには、次の三つのキーワードをみんなに話します。

第一のキーワードは「学ぶ」と「楽しむ」です。学問の「学」は、客観的な仮説を立てる、本当の意味での研究です。だれが見てもなるほどという客観性でしょう。ところが、音楽の「楽」だと、横浜を楽しむ、あるいは何々を楽しむとなり、非常に主観的な好奇心追求型になります。好奇心だけ追いかけないと、趣味、道楽に埋没してしまいます。

それから二番目のキーワードは、「内」と「外」です。「横浜学」だったら横浜の物知りたちだけが、横浜を研究し、楽しめばいいと

いうことだけれども、そうではなくて、横浜という都市を研究するときには、外からどんなぐあいに見られているのか、日本全国でそれがどう注目しているのか。また世界からどうかという外部の視点も大事です。現代の変貌していく都市がどう見られているかという、

「内」と「外」ね。つまり、内だけでやっている郷土史研究会になってしまいます。これ、いいか悪いかじゃないんです。もちろん、現在をきちんと知るには確かに過去を探索していくかなければなりません。それは立派な学問というか、ジャンルですけれども、「横浜学」の場合は、時間軸でいえば、過去、現在、未来をもっている。また、現在や未来の「横浜」研究ならだれでも参加できるんです。だから、地域外の人たちもかかわれるのです。その意味からも「内」と「外」というキーワードは、私はすごく重視しています。

それからもう一つは、先ほど申し上げた「先生と生徒」です。いろんな市民講座が横浜市でも、大学でも開かれています。だけど、私聞く人、あなた教える人の構図は永遠に変わらないわけです。先ほどのインプットとアウトプットの構図です。つまり、生徒で講座に出ることが生きがいになって、なぜそこに行つて学ぶのかという根本的な問題が、抜け落ちてしまうのです。

生涯学習がクローズアップされている時代です。研究と生涯学習の結びつきを考えなければ、池田さんがおっしゃっているように、一人ひとりの人間を再生産していくシステムをどうこれからさまざまな講座の中で教えていくかということが問題になると思います。

研究の技法（もちろんその知恵も）も訓練していないといけない。南さんが横浜は、非常に高学歴だとおっしゃいましたが、その高学歴の人たちが吐き出すシステムが必要です。

評価システムをどうする

鈴木 すると難しいのは、評価システムの問題です。例えば二十人が応募したとします。では、その中でだれを選ぶか、あるいは、グループの場合、こちらに二十万円つけましようとして、だれが評価するかは非常に難しい。例えば審査の場合です。それは審査する側が絶対公正さが要求されます。ときどき、この人が評価できるはずがないと思うような審査員がたくさんいるわけです。

だから、これからは、評価をするための公正なシステムも必要になってくると思います。南 その評価も、自身の評価と方法の評価があるような気がします。女性協会の場合は、課題ですか、中身に対しての評価ですか。

評価はテーマで選定→応募者もうまく利用を大石 うちの場合はテーマです。それこそ全然技法を持ってない人たちもいるわけですから、テーマや目的がはっきりしていれば支援しようとなります。ただ、選考委員は外部の方たちです。私たち事務局はその選考にタッチできません。ですから、事前に応募された方にヒアリングをします。これはもうテクニクになってしまふんですけれども、応募用紙の中で、この書き方よりはこういう切り口を強調した方が通りやすいとか、この内容なら、他機関の方に応募した方がいいとか、

個別にアドバイスしています。やはり募集する側は、目的があつて、落としどころも考えているわけですから、研究したい側もそれをうまくキャッチして、見せ方とか、持っている方を身につけて、利用していくべきではないかと思ひます。

またさつきおっしゃったように、正当な評価が必要です。本当に評価方法は難しく、誰に選考委員をお願いするかも悩みます。もちろん正当な評価をしていただけの方をさまざまな分野からお願いしているのですが、年々、応募グループの傾向によって選考委員が変わってくることもあります。

南 その辺は、池田さんのところの研究員の選び方もテーマですか。

池田 いや、研究員の場合は、広報に募集の案内とテーマを出して受付期間が半月ぐらいしかないですから、出てくるテーマは応募用だと割り切っています。ただ、短い応募期間の中で出してきたセンスを見ます。言葉は悪いけれども、どういう形でうち上げたかを見て、あとは面接です。

それから、うちは、ほかに発表の場のある人は取らないんです。

鈴木 学会に所属している人とか。

池田 そうではなくて、例えばシンクタンクの研究員も応募してくるわけです。その場合は、「あなたは自分のところでやりなさい」って。比較的そういう機会のない人を取ることにはしています。

実際、研究員に決まった時点でテーマは洗い直します。つまり、お金の問題、自分が使える時間の問題、自分の能力の問題とか。あ

とは、自分のこれまでの知識や経験のストックと絡めてどの程度のがやれるのかということを検証し直します。

鈴木 そこで三年間研究して、かなり水準の高いものに仕上がったとしますね。その後、どうなるんですか。

池田 一応は終わりです。

鈴木 グラデュエイト……

池田 グラデュエイトも何にもないですよ、ご苦労さんだけです(笑)。これからの人生頑張ってください。一期は女性の方三人だったんですが、一人は夫の関係で海外に行つて、一人は家庭に戻った。

もう一人は、「日仏交流を生糸の視点から考える」を書いた女性です。彼女は、姉妹都市をテーマとして申請して選ばれたときに、歴史は全然わからなかったんです。それで生糸をテーマにしてから、横浜には日仏関係史のいい先生が住んでいますので、専門の部分はその人に聞く。こちらは、歴史の研究はどうやるかを教えて、彼女は一生懸命やつて、論文を発表したところ、日仏史学会から研究発表してくれと声がかかったんです。学会で発表して、それから日仏史学会を基地に日本とフランス関係のことを市民として研究しようとなります。言葉は悪いけれども、はまっちゃったわけです。

だから、そういう形で研究の魅力にはまる人がたくさん出てくれれば、うちの事業は成功なんで、評価はやっぱその分野その分野です。自分がどこに研究発表するかは、個人の責任だと思います。学術上の評価はその世界に出ていくしかありませんから。

こちらとしては、論文としての体裁が整っているかどうかにあえてこだわっています。中身は問わないから、情報をコントロールして論文にする力に身につければいいと割り切っています。

企画・研究の技法をみんなのものに

鈴木 大石さんは、何かを通すためには企画をする技法が必要だと、また、池田さんは、研究の技法が大事だとお話になりました。現在、そういう初歩的というかベーシックな訓練は、ほとんど日本の学校ではやっていないんです。

だから、これから生涯学習とか市民研究とか個人の民間団体とかで蓄積した企画の技法や研究の技法はきちんと共有の財産にしていけばよいと思います。そういう点では、田口さんのようにお仕事をしながら博士号を取ったときに、アフターファイブを、あるいは、土日をどのように上手に使ったのかなど、ライフワークの知恵と技法みたいなところをきちんと開示してほしい。それが次に来る世代、同世代に対する大きな足がかりとなりそうなのがするんです。

池田 企画の技法で、市民の人によく話すのは、完成され発表された研究者の論文は、何を捨てたかについて書かれてない点です。つまり、論文は最終的に選ばれたものを書くわけですから、何を捨てたかは自覚的に行わなければならない。資料の取捨選択の問題です。人のことをいうのは厄介なので、自分の書いた文章を出して、ここでこう書いたのは、資料がなくてわからなかったからごまかした

とか(笑)。あえて暴露する形で、最終的に書かれたものの裏にあるドラマを出してやると、割と取っつきやすくなります。

南 お話を聞いていて、最初にこだわりや知的好奇心などがあって、勉強から入るといって感じがするんです。一番最初に池田さんがおっしゃった、勉強から研究へのステップですね。その中で研究に一步踏み出すと、そこにはある程度企画をしなければいけないとか、資料集めとか、いろんな技術があつて、それから最終的にまとめる技術があつて、また、発表する方法があつて、またさらにステップアップしていくんですかね。だから、そこはどんな分野でも勉強から研究への転換があるような気がするんです。

研究の楽しみ

南 もう一つは、そこを進めていくと、先ほど池田さんがおっしゃった「はまってしまった」とか、鈴木さんがおっしゃった「学」か「楽」かということもある。私の経験でいうと、市立大学で講座を企画したときに、このテーマではこういう勉強をした方がいい、これは絶対役に立つ知識だと思ってやりましたら、三分の一ぐらいの人は、「とにかく勉強が楽しい」って来る人がいました。それでびっくりして、教育とか学習は一つの固有の楽しみ分野だという気がしたんです。確かに学習にはだれもが取っつきやすい楽しみがあると思うのですが、研究にはそこにいろんな技法やなんかを加えて、さらに高度な楽しみになっていく。だから、はまっちゃうという気がするんです。

皆さんは周りの人や、ご自身の体験で、楽しみはどんなでしょうか。

鈴木 ライフワークの本を書いているとき、物理学者・湯川秀樹の自伝を読みました。彼は、中間子理論を発表するときも、ものすごく集中して勉強していく。しかし、アイデアが出ないからすごく苦しい。あるいは、テーマを見つけて集中していくけれども、結局出ないと、すごい苦しみになるんです。しかし、彼は苦しみと楽しみは裏腹だと思っています。自分で決めたテーマ（山）に登って行くわけだから、苦しいけど楽しいわけです。探求のあかつきには大きな喜びも待っています。

しかし、私たちが発表者になり、人に何かを訴えたい、メッセージを送りたいとなると、相当の努力も必要です。働いている人は二足のわらじを履くことになりました。時間は二十四時間しかありません。だから、ライフワークを育てていく場合、限られた時間を上手に活用しないと、楽しむどころか、ただ苦しむばかりになってしまいます。仕事をもち人が何かをやるうとしたら、まず自分にあったテーマを見つけ、後は毎日少しずつやっていくことです。これがライフワークを楽しむコツだと思っています。

「つながる」楽しみ

大石 研究している方たちの楽しみかは何かというところ、それは「つながる」ということだと思えます。「つながる」というのにも二つあって、一つには同じような研究をしている人や組織とつながるといふネットワークの

面、もう一つは、自分自身の頭の中でアイデアや考えがつながることです。例えば子育て中のお母さんの調査を始め、保育行政はどうなっているんだろうとか地域の保育行政を調べてみる。そこで、今度政治全般に興味を持つとか、国際関係までいくように、どんな自分の中でつながっていく。「外でつながる」と「中でつながる」という両面があると思います。

社会的責任も認識

田口 私は今、戦後間もなく接収され、四十年近くかかって返還された場所である本牧の街づくりについて研究しているんです。十月に沖繩で自治体学会があって、そこで本牧の接収と接収解除、街づくりを、分科会で話をしてくれというんで行ったんです。

行ってみて、沖繩の持っている問題は大きいと思われられました。私は自由な立場で研究者として本牧のことをやっていた。それを一つの題材としてやっているわけですが、抱えている問題は、接収と国との関係、米軍との関係とか沖繩と同じような問題があるわけですね。つまり、研究者も、自由な立場で研究しているけれども、研究の質が相当問われるのを自分ながらに再認識し、「私は好きでやっているだけです」では、テーマによっては済まない。活字にし、発表するのは、大きいえば研究者の社会的な立場が問われることが、物によってはある。そのテーマの重さ、社会的な責任も同時に認識しながらやっていきたいと思いました。

研究には金と時間がかかる

池田 僕自身も研究しているわけですが、人間、楽しみには、時間と金をかけても一向惜しくないということです。

僕らがして、他ではやらないことといえ、一本の論文にどれだけ金がかかるかなんてことも市民に教えてあげることです。この調査を行うにはどの程度とか、研究上の経費構造も話します。僕らは、勉強や研究に金と時間がかかると、はつきり言っていますから、それでもやってみようという気合いを期待します。それでやる人が楽しんでいることになるんで、あれこれしてくれなきゃわかりませんでは、楽しみにならないです。

鈴木 覚悟が要るんですね。

池田 そこら辺はしょうがないですね。南 二時間にわたって本当にありがとうございます。市民の研究活動ということで、何をどう考えたらいいかまでは整理し切れませんでした。行政的な課題としては、サポート体制は必要なんです。人的であれ、物的であれ、資金的なものであれ、何らかの形で行う必要がある。ただ、研究は、課題の発見の問題から、技法の問題から含めて、やはり知的なトレーニングの問題であるわけで、一番最初に申しましたとおり、横浜の場合は、非常に高学歴な都市であるということから、今後研究に対して市民の目が向いていくことは間違いないと思います。その辺の課題提起みたいな形でおもしろいお話が伺えたという気がします。本当にどうもありがとうございます。